

産業研究所活動報告

～日・越・タイ共同研究シンポジウム (2004.01.27：ベトナム・ダナン市)～

堀 潔

1. シンポジウムの意義

去る2004年1月27日、ベトナム・ダナン大学において、日本・ベトナム・タイ3カ国の研究者による共同研究シンポジウム「東南アジアにおけるサポーティング産業育成についての共同研究—日本の役割とタイの経験をふまえて—」が開催された。本シンポジウムは、桜美林大学産業研究所が企画・提案し、ベトナム・ダナン大学経営開発・企業コンサルティングセンター及びタイ・タマサート大学東アジア研究所日本研究センターを含めた3カ国の研究機関を中心とする共同研究協力の下に実施された国際共同研究プロジェクトを総括するものであり、国際交流基金アジアセンターの“アジア知的交流助成”を受けて実施されたものである（なお、本シンポジウムに先立つ2003年9月24日には本学プラネット淵野辺キャンパスPRUNUS HALLにおいて、このプロジェクトに関する第1回目のシンポジウムが開催されている）。

この共同研究プロジェクトの最初の問題意識は「ベトナムの工業化をどう進めていくか」という点にあった。とくに、雇用吸収力の高い自動車・オートバイ・家電などの加工組立型産業の“移殖”と定着が国家の工業化政策の重要課題であり、そのための外資系企業によるベトナムへの直接投資を促進していく上でのサポーティング産業の育成が重要だと考えられたのである。

実は、東南アジアにおけるサポーティング産業の育成にはタイの先行事例がある。すなわち、

- 1980年代（とくに後半）以降、自動車・同部品産業の育成のためにタイ政府は様々な政策的措置を駆使し、日本の政府・産業界による援助も行われた。
- その育成方法は、日本企業が国内での部品産業育成に関して行った方法に基本的には依拠している。
- その結果、タイの自動車部品産業は成長し、その部品産業の存在ゆえに日本以外の自動車メーカーのタイへの直接投資も行われるようになった。

こうした経験から、「サポーティング産業の育成こそが工業化政策の要諦である」ことが想起され、今般の研究プロジェクトの開始へとつながっていったのである。

2. シンポジウムの概要

シンポジウムは1月27日（木）午前8時30分から始まった。ダナン大学学長 Phan Quang Xung 博士の歓迎の挨拶と桜美林大学・佐藤東洋士学長をはじめ来賓各位の祝辞の後、午前9時過ぎから5人の研究者による報告と、報告論文に対するコメントが行われた。各報告者と報告タイトルは以下のとおりである（敬称略）。

- ① Do Manh Hong（桜美林大学）：「経済のグ

ローバル化と発展途上国におけるサポーターティング産業の育成—分析のための理論的枠組み—

- ② Kriengkrai Techakanont (タマサート大学)：「タイにおけるサポーターティング産業の発展過程」
- ③ 堀 潔 (桜美林大学)：「日本のサプライヤーシステム：その形成・発展と変貌」
- ④ Le The Gioi (ダナン大学)：「経済のグローバル化とベトナムにおけるサポーターティング産業の育成—産業発展の実証分析の試み—」
- ⑤ Mai Duc Loc (ベトナム・アジア太平洋経済研究センター《VAPEC》)：「ベトナムにおける外国直接投資の効率性上昇のためのサポーターティング産業育成」
- ⑥ Tran Van Tho (早稲田大学)：「外国直接投資とベトナムにおけるサポーターティング産業の発展」

報告は、各報告者の出身国や専門分野の違いなどから、極めて多様で示唆に富むものであった。紙幅の関係ですべての報告・コメントの詳細には触れることはできないが、いくつか印象に残ったところを記しておこう。

例えば、Do Manh Hong氏(桜美林大学)は、一国のサポーターティング産業が外資系企業に対して部品等の供給を通じて利益をもたらすのと同時に、サポーターティング産業自身も外資系企業からの技術移転を通じて自らの製造能力を高め、それが一国の産業競争力を強化することにもつながっていく、という、外国直接投資とサポーターティング産業育成の相互作用を理論的に明らかにした。

また、Kriengkrai Techakanont氏(タマサート大学)は、日本の自動車産業が国内で形成したいわゆる“系列関係”がタイでの部品調達過程ではさほど強くは見られず、むしろ「系列越え」と呼ばれるような柔軟な企

業間取引関係が見られたことを指摘した。完成品メーカーと部品メーカーとの間の取引関係の“長期継続的”“固定的”“排他的”であることが(良くも悪くも)日本のサプライヤーシステムの特徴であると思われてきたが、そうした特徴がシステム全体の効率性や競争力とどれほど関連性があるのか、改めて考えさせられる報告だった。

堀 潔(桜美林大学)は、我が国におけるサプライヤーシステムは、その構成員たる完成品メーカーと部品メーカーの双方にとって利益をもたらすものであったからこそ形成され発展したのだ、との考えに立ち、個別企業が激しい企業間競争のなかで何とか生き残りを図ろうとした“結果”としてサプライヤーシステムが形成されたことを明らかにした。長期不況と国際化・情報化の進展に伴って従来型の“下請け関係”は大きく変貌しつつあるが、環境変化に対応したシステムの変貌は危機感を持つ個別企業の“自己変革”によってもたらされており、“自己変革”へのインセンティブを企業に与える競争的市場構造の確立と維持こそが政策的に重要なのだ、と述べた。

シンポジウム終盤では会場の聴衆からも発言があり、とくに、サポーターティング産業“育成政策”よりも個別企業が現状に甘んじず、起業家精神を発揮して新たな可能性にチャレンジすることの重要性をもっと認識すべきではないか、との意見も出た。

3. シンポジウムの成果と今後の課題

今回のシンポジウムは3カ国からのべ12人の報告者・コメンテーターが参加する大規模なものであった。多様な意見や考え方が交換されたことだけでも十分刺激的で実り多いシンポジウムであったと思うが、主に時間的な制約から、個別の論点について議論が深め

られることはなかった。この研究プロジェクトを通じて、今後は特定の問題意識を共有できる研究者相互間の交流が深まり、特定の研究領域でのより優れた成果が出るよう期待したい。

さらに、今回のシンポジウムでは我が桜美

林大学とベトナム・ダナン大学の学長レベルでの交流も行われた。産業研究所が主体となって行った研究交流をきっかけとして、両大学の多面的な国際交流関係の発展につながることを祈念したい。